

平成 20 年度 兵庫県景気動向検討会結果について

- 1 日 時 平成 21 年 3 月 3 日 (火) 13:30 ~ 16:30
- 2 場 所 兵庫県民会館 7 階 亀の間
- 3 出席者 アドバイザリー・スタッフ： 岩出 眞理 (みなと銀行調査室代理)
信貴 宏 (神戸女子大学文学部教授)
友野 哲彦 (兵庫県立大学経済学部准教授)
成毛 建介 (日本銀行神戸支店営業課長)
武者 加苗 (関西社会経済研究所)
五十音順

事務局：企画県民部政策室統計課長 外 3 名
産業労働部産業政策局産業政策課 1 名

4 景気基準日付 (景気の転換点) の設定について

(1) 第 14 循環の景気基準日付 (景気の山) の設定について

兵庫県における第 14 循環の景気の山を平成 19 年 3 月 (暫定) と設定し、あわせて第 13 循環の景気の山を平成 12 年 9 月 (暫定) から平成 12 年 7 月、景気の谷を平成 14 年 2 月 (暫定) から平成 13 年 12 月とそれぞれ修正し、確定した。

この結果、景気の後退局面は、翌月の平成 19 年 4 月からとなり、平成 14 年 1 月から続いた景気回復局面は、63 か月間となった。今回の景気拡大は「いざなぎ景気 (第 6 循環) 」 (昭和 40 年 12 月 ~ 45 年 9 月、57 か月) を上回った。

(2) 第 14 循環の景気基準日付の設定方法等について

事務局より、県内景気資料と第 13 循環及び第 14 循環の景気基準日付の設定案が説明され、質疑、意見交換を行った結果、現時点で、平成 19 年 3 月を景気の山 (暫定) とし、あわせて、第 13 循環の景気基準日付を確定させることに対する設定方法、検証方法は妥当との結論に至った。

各指標について、より県内景気動向を反映している指標への見直しを検討する必要があるとの意見が出された。

5 今回の景気拡大局面の特徴について

- ・ 拡張期間は最長であるが、回復のテンポ、後退局面での下落率とも緩やかであった。
- ・ 拡張局面から後退局面にかけて高原状態 (高水準を維持) が 1 年近く続き、明確な景気の転換点の判定が付きにくいものであった。
- ・ 輸出主導の景気回復であり、輸出向けの製造業が県内景気の牽引となり、企業利益は大きく伸びたが、個人消費への波及は大きくなかった。
鉱工業指数は、生産は平成 18 年がピークとなるも、平成 19 年も高い水準を維持した。
実質百貨店販売額、新車登録台数 (乗用車、バス、トラック) は拡張期間中も低下傾向を示した。

6 最近の県下の景気後退について

- ・ 兵庫 C I (兵庫県景気総合指数) は、平成 20 年 10 月以降 3 か月連続の前月差減となった。
- ・ 兵庫県鉱工業指数は、生産指数の平成 20 年平均が前年比 5.2% 減となった。
- ・ 県下の製造業は、受注スパンが長い業種もあり、全国と比較して底堅く推移してきたが、今後の動向は不透明である。また、自動車を中心に輸送機械産業の急速な在庫調整が行われているが、県下は輸送機械産業の占める割合が全国に比較して小さいこともあり、今後の景気動向の動きを注視する必要がある。